

長崎県公共建築工事積算基準等資料

平成29年 2月

長崎県土木部建築課

長崎県公共建築工事積算基準等資料

目 次

第1編 工事費	3
第2編 共通費	4
第1章 離島調整費	4
第2章 共通仮設費	4
第3章 現場仮設費	8
第4章 一般仮設費等	11
第5章 その他	12
第3編 単価及び価格	17
第1章 共通事項	17
第2章 建築工事	※参照
第3章 電気設備工事	※参照
第4章 機械設備工事	※参照
第5章 昇降機設備工事	※参照

附表 補正市場単価算出方法

※参照

(※) 「第3編単価及び価格の第2章から第5章」並びに「附表」は、公共建築工事積算基準等資料（平成28年版）（国土交通省大臣官房官庁営繕部計画課）の「第3編 単価及び価格」の「第2章 建築工事」から「第5章 昇降機設備工事」並びに「附表 補正市場単価算出方法」を適用する。

長崎県公共建築工事積算基準等資料（以下「本資料」という。）は、「長崎県公共建築工事積算基準」、「公共建築工事標準単価積算基準」（以下「単価基準」という。）及び「長崎県公共建築工事共通費積算基準」（以下「共通費基準」という。）等の運用を長崎県としてとりまとめたもので、適正な工事費の積算に資することを目的とする。

第1編 工 事 費

1 公共料金の取り扱い

現場発生による、湧水を公共下水道に流す場合等の費用に「当初請負代金額から消費税等相当額を減じた額を当初工事費内訳書記載の工事価格で除した比率」を乗じない。

2 数値の取り扱い

設計変更における工事価格

算出された金額の範囲内で、原則として千円単位となるように調整する。

第2編 共通費

第1章 離島調整費

1 離島調整費の算定方法

離島調整費は、離島調整費率により算定する。

離島調整費＝（直接工事費－離島調整費対象外の直接工事費）× 離島調整費率

第2章 共通仮設費

1 共通仮設費の区分

共通仮設費は、一般工事、鉄骨工事、その他工事、発生材処分費に区分して算定する（離島調整費を算定する場合は、それぞれ離島調整費対象部分と対象外部分を区分して算定する。）。

なお、ここでいう一般工事とは直接工事費から鉄骨工事、その他工事、発生材処分費を除いた工事をいう。

2 共通仮設費の算定方法

(1) 共通仮設費の算定は共通仮設費率により算定する。

(2) 共通仮設費率の算定に用いるT（工期）は、入札公告等に示された開札予定日から工期末までの日数を元に、開札から契約までを考慮し7日を減じた日数を30日／月にて除す。その値は小数点以下第二位を四捨五入して一位止めとする。

なお、設計図書等に工期の始期が明示されている場合等は、その始期から工期末までの日数を30日／月にて除し、この値をT（工期）として共通仮設費率を算出することができる。

イ. 工期を日数（「〇〇日間」）にて定めた場合は、その日数とする。

ロ. 現場施工の着手時期が明示されている場合は、現場着手指定日から工期末までの期間の日数とする。

ハ. 契約締結に議会の議決が必要な場合は、当該議案採決予定日の翌日から工期末までの期間とする。

3 共通仮設費率に含まれない内容

以下の項目については、共通仮設費率に含まれないため、設計図書等に基づき積み上げにより算定する。

(1) 準備費

敷地測量、道路占有料、仮設用借地料、既存施設内の家具、什器及び機器等の移動・復旧に関する費用

(2) 仮設建物費

イ. 宿舎、設計図書によるイメージアップ費用

ロ. 電気設備工事、機械設備工事及び昇降機設備工事における、監理事務所（監督職員事務所）、備品等の費用

ハ. 建築工事における、監理事務所（監督職員事務所）の備品等の費用のうち、設計図書に当該工事固有の事情により指定された内容

(3) 工事施設費

仮囲い、工事中道路、歩道構台、設計図書によるイメージアップ費用

(4) 環境安全費

安全管理・合図等の要員に要する費用、工事現場（施設）の警備に要する警備要員、機械警備及び交通誘導警備員に要する費用

(5) 機械器具

イ. 新営工事における荷揚用揚重機械の費用

機種を選定及び存置日数は、表1-1～表1-5を参考とし、施工条件等により機種を選定

表1-1 地上階の躯体用揚重機械存置日数（鉄筋コンクリート造）

階数(N)	適用機種	存置日数	備考
1	16 t	$13 \times A + 1$	
2	16 t	$21 \times A + 2$	
3	16 t	$29 \times A + 3$	
4	20 t	$37 \times A + 4$	
5	25 t	$45 \times A + 5$	

表1-2 地下階の躯体用揚重機械存置日数（鉄筋コンクリート造）

階数(N)	適用機種	存置日数	備考
B1	25 t	$12 \times A + 1$	
B2	25 t	$20 \times A + 2$	
B3	25 t	$28 \times A + 3$	

表1-3 塔屋階の躯体用揚重機械存置日数（鉄筋コンクリート造）

階数(N)	適用機種	存置日数			備考
		100 m ² 未満	300 m ² 未満	500 m ² 未満	
P1	躯体地上階による	3	4	5	1階当たりの面積
P2	躯体地上階による	6	8	10	
P3	躯体地上階による	9	12	15	

表1-4 地上階の仕上用揚重機械存置日数（鉄筋コンクリート造）

階数(N)	適用機種	存置日数	備考
1	16 t	$4 \times A + 1$	
2	16 t	$8 \times A + 2$	
3	16 t	$12 \times A + 3$	
4	二本構(一本構)リフト	仕上期間	建築面積 1,000 m ² 毎に 1台
5	二本構(一本構)リフト	仕上期間	建築面積 1,000 m ² 毎に 1台

表1-5 地下階の仕上用揚重機械存置日数（鉄筋コンクリート造）

階数(N)	適用機種	存置日数	備考
B1	20t	$4 \times A + 1$	
B2	20t	$8 \times A + 2$	
B3	20t	$12 \times A + 3$	

注) (各表共通) 1. $A = \text{建築面積} / 750 \text{ m}^2$ (計算過程においてAの値を端数処理する場合は、小数点以下第三位を四捨五入し小数点以下第二位とする。建築面積は基準階面積とし、500 m^2 未満の場合は500 m^2 とする。)

2. 存置日数の端数処理は、小数点以下第一位を切上げ整数とする。

3. 各階の面積が著しく異なる場合は、別途考慮する。

ロ. 改修工事における荷揚用揚重機械器具の費用は、施工内容、施工条件等により機種を選定し、存置日数を設定する。

(6) その他

材料及び製品の品質管理試験に要する費用は、コンクリート圧縮試験費及び鉄筋の圧接試験費（引張り試験及び超音波探傷試験）を除き、以下の試験費を積み上げにより算定して加算する。

- ・アスベスト粉じん濃度測定
- ・アスベスト含有量調査
- ・室内空気中の化学物質の濃度測定
- ・六価クロム溶出試験費
- ・レディーミクストコンクリート単位水量測定費
- ・PCB含有シーリング材の判定試験費
- ・上記に類する各種試験費

4 鉄骨工事における共通仮設費率の補正

共通費基準 3 (4) の場合は、共通仮設費率に0.9を乗じる。また、補正の対象となる鉄骨工事の取り扱いは、第5章1による。

なお、積み上げによる共通仮設費がある場合には、これを鉄骨工事以外の一般工事の共通仮設費とし、一般工事の純工事費は鉄骨工事以外の一般工事の純工事費と鉄骨工事の純工事費に区分する。

5 監理事務所を設けない場合の補正

(1) 共通費基準 3 (3) 表-5のうち建築工事において、監理事務所（監督職員事務所）を設けない場合は、一般工事の共通仮設費率に0.9を乗じる。

(2) 鉄骨工事における共通仮設費率の補正をおこなう工事で、監理事務所を設けない場合は(1)で補正した率に0.9を乗じる。

(3) 既存施設を監理事務所（監督職員事務所）として利用できる場合は、利用中の維持管理費及び利用後の現場復旧に要する費用を考慮し低減は行わない。また、条件明示による事

務所の規模の違いによる補正は行わない。

6 その他工事を含めて発注する場合

共通費基準 3 (5) の場合は、一般工事とその他工事の直接工事費の合計額に対応する共通仮設費率により一般工事の共通仮設費を算定し、その他工事の共通仮設費は共通仮設費率を1%として算定する。

なお、積み上げによる共通仮設費がある場合には、これを一般工事の共通仮設費とし、一般工事の純工事費とその他工事の純工事費に区分する。

7 労務費の比率が著しく少ない工事

共通費基準 3 (6) の労務費の比率が著しく少ない工事の共通仮設費率は、その率に0.9を乗じる。

なお、労務費の比率が著しく少ない工事とは、直接工事費に占める労務費の割合が概ね10%以下の工事。

8 建設発生土処分費及び発生材処分費の取り扱い

建設発生土処分費及び発生材処分費を含めて発注する場合は、これらの費用の共通仮設費は算定しない。

9 リース料の取り扱い

仮設庁舎等をリースで発注する場合のリース料については、共通仮設費を算定しない。

共通仮設費率は、リース料を含む直接工事費の合計額及び工期に対応する共通仮設費率とする。

10 共通仮設費率の留意事項

(1) 共通仮設費率に含まれる動力用水光熱費

イ. 新営工事は引込費用及び使用料が該当する。(工事用)

ロ. 改修工事は既存施設からの引き込みが可能であるため、主にメーター設置費と使用料が該当する。(工事用)

ハ. 本受電後の電力基本料金については、設計図書の特記に基づき積み上げにより算定して加算する。

(2) 屋外整理清掃費

施工中に発生する端材等の処理に要する費用(指定された集積場所から構外へ搬出するための積込み、運搬費及び処分費)は、共通仮設費率に含む。

11 設計変更における工期について

工事一時中止(一部一時中止の場合も含む)があった場合、共通仮設費率の算定に用いるT(工期)には、工事一時中止(一部一時中止の場合も含む)を理由とした工期延伸する期間を含まな

第3章 現場管理費

1 現場管理費の区分

現場管理費は、共通仮設費で区分した項目ごとに算定する。

2 現場管理費の算定方法

(1) 現場管理費の算定は現場管理費率により算定する。

(2) 現場管理費率の算定に用いるT（工期）は、入札公告等に示された開札予定日から工期末までの日数を元に、開札から契約までを考慮し7日を減じた日数を30日／月にて除す。その値は小数点以下第2位を四捨五入して1位止めとする。

なお、設計図書等に工期の始期が明示されている場合等は、その始期から工期末までの日数を30日／月にて除し、この値をT（工期）として現場管理費率を算出することができる。

イ. 工期を日数（「〇〇日間」）にて定めた場合は、その日数とする。

ロ. 現場施工の着手時期が明示されている場合は、現場着手指定日から工期末までの期間の日数とする。

ハ. 契約締結に議会の議決が必要な場合は、当該議案採決予定日の翌日から工期末までの期間とする。

3 現場管理費率に含まれない内容

以下の項目については、現場管理費率に含まれないため、設計図書等に基づき積み上げにより算定する。

(1) 要員に関するもの及び工事实績情報（コリンズ）の登録

イ. 要員等の費用

条件明示された要員等の費用（共通仮設費の費用以外、現場雇用労働者の給料等）

ロ. 昇降機設備工事における工事实績情報（コリンズ）の登録等に要する費用工事費が2,500万円未満の場合

なお、工事費が2,500万円以上の場合は、その率に含まれている。また、500万円未満の工事費は、登録を必要としない。

『工事实績情報登録費用』＝登録作業費^{※1}＋登録料（税抜き）

※1：登録作業費＝特殊作業員1.0人・日

4 鉄骨工事における現場管理費率の補正

共通費基準 4（4）の場合は、現場管理費率に1.0を乗じる。また、補正の対象となる鉄骨工事の取り扱いは、第5章1による。

なお、積み上げによる現場管理費がある場合には、これを鉄骨工事以外の一般工事の現場管理費とし、一般工事の工事原価は鉄骨工事以外の一般工事の工事原価と鉄骨工事の工事原価に区分する。

- 5 その他工事を含めて発注する場合
共通費基準 4（5）の場合は、一般工事とその他工事の純工事費の合計額に対応する現場管理費率により一般工事の現場管理費を算定し、その他工事の現場管理費は現場管理費率を2%として算定する。
なお、積み上げによる現場管理費がある場合には、これを一般工事の現場管理費とし、一般工事の工事原価とその他工事の工事原価に区分する。
- 6 労務費の比率が著しく少ない工事
共通費基準 4（6）の労務費の比率が著しく少ない工事の現場管理費率は、その率に0.8を乗じる。
なお、労務費の比率が著しく少ない工事とは、直接工事費に占める労務費の割合が概ね10%以下の工事。
- 7 建設発生土処分費及び発生材処分費の取り扱い
建設発生土処分費及び発生材処分費を含めて発注する場合は、これらの費用の現場管理費は算定しない。
- 8 リース料の取り扱い
仮設庁舎等をリースで発注する場合のリース料については、現場管理費を算定しない。
なお、現場管理費率は、リース料を含む純工事費の合計額及び工期に対応する現場管理費率とする。
- 9 支給材を使用する工事
支給材（入居官署又は発注者側で購入・製作された資機材）を使用して工事を施工する場合は、支給材を購入すると仮定した評価額の2%を現場管理費に加算する。
ただし、再利用資機材については算定しない。
- 10 設計変更における工期
工事一時中止（一部一時中止の場合も含む）があった場合、現場管理費率の算定に用いるT（工期）には、工事一時中止（一部一時中止の場合も含む）を理由とした工期延伸する期間を含まない。

第4章 一般管理費等

1 一般管理費等の算定方法

(1) 前払金支出割合による補正

- イ. 前払金支出割合が35パーセント以下とした場合の一般管理費等は、表3-1の前払金支出割合区分ごとに定める補正係数を一般管理費等率に乗じる。
- ロ. 前払い金の支出割合に対して補正係数を求め一般管理費等率に乗じるものであり、支払限度額の割合に対しては適用しない。

表3-1 一般管理費等率補正係数

前払金支出割合区分 (%)	補正係数
5以下	1.05
5を超え15以下	1.04
15を超え25以下	1.03
25を超え35以下	1.01

(2) 契約保証費について

共通費基準 5 (1) による契約保証費については、工事原価に表3-2による契約保証費率を乗じ算出した金額を一般管理費等に加算する。

表3-2 契約保証費率

内 容	(%)
保証の方法1：発注者が金銭的保証を必要とする場合 (長崎県建設工事標準請負契約書第5条を採用する場合)	0.04
保証の方法2：発注者が役務的保証を必要とする場合	0.09
保証の方法3：上記以外の場合	補正しない
注) 契約保証のうち、保証の方法3の具体例は以下のとおり。 ① 当初予定価格内訳書記載の工事費が300万円未満の工事	

(3) 住宅瑕疵担保履行法による資力確保措置のための費用

「特定住宅瑕疵担保責任の履行の確保等に関する法律」(平成19年法律第66号)に該当する住宅の新築工事の場合は、資力確保措置のための費用を見積等により算出し、一般管理費等に加算する。ただし、設計変更においては対象としない。

第5章 その他

1 第1章3及び第2章3の新営工事における主体構造物にかかわる鉄骨工事の補正に関する取り扱いについて

(1) 鉄骨造及び鉄骨鉄筋コンクリート造における取り扱い

鉄骨造及び鉄骨鉄筋コンクリート造において、鉄骨工事として科目で取り扱う項目は表4-1のとおり全て補正の対象とする。ただし、建方機械器具（定置式・移動式）は、共通仮設費の一般工事の区分として積み上げる。

(2) 鉄筋コンクリート造における取り扱い

体育館、倉庫及び格納庫等の鉄筋コンクリート造において、屋根部が鉄骨造の場合は補正の対象とする。

(3) 鉄塔の取り扱い

鉄塔については単体として取り扱い、設置場所（地盤面又は鉄筋コンクリート造屋上面）にかかわらず補正の対象とする。

(4) フラットデッキの取り扱い

フラットデッキについては、鉄骨造の場合に限り補正の対象とする。

表4-1 鉄骨造・鉄骨鉄筋コンクリート造における補正

(注) ○印は対象項目、△印は鉄骨造のみ対象項目

鉄骨造・鉄骨鉄筋コンクリート造における補正					
鉄骨工事					
鋼材費	○	工場加工費	○	鉄骨運搬費	○
工場塗装	○	溶融亜鉛めっき処理	○	現場錆止め塗装	○
建て方費	○	溶接試験	○	現場溶接	○
アンカーボルト	○	スタッド溶接	○	柱底均しモルタル	○
デッキプレート (合成スラブ用)	○	フラットデッキ (床型枠用)	△	耐火被覆	○
				専用仮設	○
付帯鉄骨（母屋、胴縁）	○	鉄骨階段・鉄骨庇	△	設備機器架台	○
鉄塔	○	C. W一次ファスナー	○		

2 その他工事として取り扱う工事

その他工事として取り扱う工事の具体例を表4-2及び表4-3に示す。

なお、表4-2及び表4-3には共通費基準 表-7その他工事 に示された以外の工事も含まれているが、それらを一般工事に含めて発注する場合においても、共通費基準 3 (5) 及び4 (5) の定めによる。

表4-2 その他工事としての取り扱い（建築工事）

（注）○印は対象項目、×印は対象外項目

特殊な室内装備品	家具・書架及び実験台の類で通常の建物本体工事に含まれない特殊な室内装備品				
壁面収納（造り付け以外）	○	ローパーティション	○	移動書架	○
書架（スチール棚）	○	書架（既製木製棚）	○	家具（造り付け以外）	○
造り付け家具	×	カーテン	×	ブラインド	×
ファンコイルカバー	×	じゅうたん	×	OAフロア	×
一般（湯沸室）流し台	×	トイレブース	×	可動・移動間仕切	×
実験流し台	○	実験・医療器具	○	シールド工事	○
舞台機構装置	○	浴室・シャワーユニット	×	厨房機器	×
清掃用ゴンドラ	×				
造園工事	種目で造園工事として取り扱われる項目全て。				
樹木費	○	植え込み費	○	地被類（芝張り、は種）	○
支柱	○	移植	○	客土	○
植栽基盤	○	土壌改良	○	ツリーサークル	○
伐採・抜根	○	人工土壌	○	排水マット敷設	○
庭石・モニュメント	○	温室工事	○		
舗装工事	種目で舗装工事として取り扱われる項目全て。ただし、土工、縁石、側溝は一般工事とする。				
土工事	×	直接仮設（舗装用）	○	アスファルト舗装	○
コンクリート舗装	○	タイル張り舗装	○	石張り舗装	○
インターロッキング舗装	○	舗石舗装	○	グラウンド・テニスコート	○
平板舗装	○	路床整正	○	舗装機械運搬	○
トラフィックペイント	○	縁石	×	L型側溝・V型溝	×
排水ます	×	開きよ（U字溝）	×	排水管	×
取り壊し工事	種目で取り壊し工事として取り扱われる項目全て。ただし、アスベスト含有建材処理工事については、一般（改修）工事とする。				
とりこわし費	○	集積積込み	○	アスベスト処理工事費	×
とりこわし材運搬費	○	とりこわし機械運搬	○		

※ 種目にかかわらず、上記で対象となっている項目は、その他工事として取り扱う。

表4-3 その他工事としての取り扱い（設備工事）

【共通事項】

通常の建物本体工事に含まれない下記の設備等について、システム一式を専門工事と扱い、当該据付調整費、諸経費まで含んで計上したものを対象とする。

（注）○印は対象項目、×印は対象外項目

さく井設備	さく井設備として取り扱われる項目全て。ただし、ポンプや揚水管の交換は一般工事。	
揚水井設備	○	掘さく及び電気検層後、ケーシング、スクジーン、砂利充てん、探井戸用水中モーターポンプ設置（揚水試験、水質検査含む）を行う、飲用水、雑用水、融雪用の揚水井
地中熱交換井設備	○	掘さく後、地中熱交換器、けい砂等充てんを行う、空調及び融雪用の地中熱交換井
深井戸用水中モーターポンプ交換	×	ポンプ及び揚水管の交換
特殊空調設備	特殊空調設備として取り扱われる項目全て。	
恒温恒湿室	○	精度が高く一定の温湿度管理を行う部屋用の空調設備（部屋本体を含む場合あり）
クリーンルーム	○	空気清浄度の確保が必要な部屋用の空調設備（部屋本体を含む場合あり）
循環ろ過設備	循環ろ過設備として取り扱われる項目全て。	
プールろ過設備	○	プール水を循環させてろ過や滅菌等を行い、水質を維持する設備
浴槽ろ過設備	○	浴槽水を循環させてろ過や滅菌等を行い、水質を維持する設備
排水処理設備	排水処理設備として取り扱われる項目全て。ただし、浄化槽設備及び雨水利用設備の集水部（ルーフドレン等）から雨水流入槽に至る配管は一般工事	
厨房排水障害設備	○	厨房排水における有害成分を下水道の放流基準値以下に処理する設備
廃水処理設備	○	有害廃水（病原菌、放射性物質等）を下水道の放流基準値以下に処理する設備
排水再利用設備	○	原水（雑排水等）を便所洗浄水、散水、修景用水等の用途に適合する水質まで処理する設備
雨水利用設備	○	雨水を便所洗浄水、散水、修景用水等の用途に適合する水質まで処理する設備
	×	集水部（ルーフドレン等）から雨水流入槽に至る配管。 上記ルート中の雨水遮断弁装置等を独立して制御する場合の自動制御設備
浄化槽設備	×	ユニット型、現場施工型
ごみ処理設備	ごみ処理設備として取り扱われる項目全て。ただし、厨房のディスポーザーは一般工事	
ダストシュート	○	各階に設けた投入口より縦管をつたって下層の集積所にごみを集める設備
ごみ真空輸送装置	○	建物に設けたダストシュート等と集積所をパイプで結び、パイプ内の空気を集積所側から吸引することで、広範囲からごみを収集・輸送する設備
コンパクト・コンテナ	○	かさの大きい紙ごみを高圧縮してコンテナに詰め、コンテナごと搬出する設備
焼却装置	○	焼却炉
ディスポーザー	×	厨房で扱うディスポーザーは一般工事
搬送設備	搬送設備として取り扱われる項目全て。 （小荷物専用昇降機は昇降機設備工事として扱う）	
書類搬送設備	○	気送管や垂直コンベア等を使用し、書類をステーションまで搬送する設備
自動倉庫	○	スタッカークレーン、無人走行台車等を用いた立体自動倉庫
昇降装置	○	段差解消機、ステージ昇降装置、ホイストクレーン等
機械式駐車設備	機械式駐車設備として取り扱われる項目全て。	
機械式駐車設備	○	2段式、タワー式、水平循環式、平面往復式等
特殊ガス設備	特殊ガス設備として取り扱われる項目全て。	
医療用ガス設備	○	酸素、窒素、笑気ガス等の医療用ガスの供給を行う設備
実験用ガス設備	○	酸素、窒素、アルゴン、ヘリウム等の実験用ガスの供給を行う設備
高圧空気充てん設備	○	ダイビング用高圧空気ボンベへ空気充てんを行う設備
実験機器設備	実験機器設備として取り扱われる項目全て。	
実験機器設備	○	ドラフトチャンバー、安全キャビネット、クリーンベンチ、オートクレーブ、実験台、飼育装置、飼育ケージ等の実験機器類
医療器具設備	医療器具設備として取り扱われる項目全て	
医療器具設備	○	手術台、歯科用椅子、各種検査機器（X線、CT、MRI、超音波等）、介護補助用リフト等の医療用設備
昇降機設備	○	リニューアル工事に係るもののみ
太陽光発電設備	×	

- 3 専門工事業者に直接発注する工事（電気工事、管工事を除く）
外壁改修工事、防水工事等を専門工事業者に発注する場合、その専門工事に係る項目はその他工事として取扱う。
- 4 その他工事を単独で発注する場合の共通費
専門工事業者からの見積りを参考に計上する。
- 5 指定部分及び指定部分工期
原則として、指定部分の工期は、共通仮設費及び現場管理費における算定に用いる工期（T）に用いない。
なお、指定部分とは工事の完成に先立ち引渡しを受けるべきことを設計図書により指定した工事範囲をいい、その工事範囲の完了期限を指定部分工期という。
- 6 新営工事と改修工事を一括して発注する場合
 - （1）共通仮設費及び現場管理費は、新営工事と改修工事に区分して算定する。
 - （2）共通仮設費率及び現場管理費率は、新営工事と改修工事の直接工事費の合計額に対応する新営工事と改修工事それぞれの共通仮設費率、純工事費の合計額に対応する新営工事と改修工事それぞれの現場管理費率とする。
 - （3）積み上げによる共通仮設費及び現場管理費は、新営工事と改修工事のうち主な工事の共通仮設費又は現場管理費に計上する。
 - （4）一般管理費等は、新営工事と改修工事の工事原価の合計額に対する一般管理費等率により算定する。
- 7 敷地が異なる複数の工事を一括して発注する場合
 - （1）共通仮設費及び現場管理費は、それぞれの敷地の工事毎に算定する。
 - （2）共通仮設費率及び現場管理費率は、それぞれの敷地の工事毎の直接工事費及び工期に対応する共通仮設費率、純工事費及び工期に対応する現場管理費率とする。
 - （3）積み上げによる共通仮設費及び現場管理費は、それぞれの敷地の工事毎に計上する。
 - （4）一般管理費等は、それぞれの敷地の工事毎の工事原価の合計額に対する一般管理費等率により算定する。
- 8 建築工事、電気設備工事、機械設備工事及び昇降機設備工事のいずれかの工事に他の工事を含めて発注する場合
 - （1）共通仮設費及び現場管理費は、それぞれの工事種別毎の共通仮設費及び現場管理費に関する定めにより算定し、それらの合計による。
ただし、主たる工事以外のいずれかの工事（昇降機設備工事を除く。）が、主たる工事と比較して軽微な工事であり、かつ、単独の工期設定がない場合は、当該工事を主たる工事に含め、主たる工事の定めにより共通仮設費及び現場管理費を算定することができる。なお、主たる工事とは発注時の工事種別をいう。

※軽微な工事とは、原則として次のいずれかに該当するものをいう。また、工事内容、工事費の比率等を考慮し、適切に対応する。

①主たる工事以外のいずれかの工事の直接工事費が、主たる工事の直接工事費の 1/20 以下又は 300 万円以下の場合

②工事内容、工事費及び工期から判断して、①に準ずるとみなせる場合

(2) 積み上げによる共通仮設費及び現場管理費は、それぞれの工事種別毎に区分して計上する。

(3) 一般管理費等は、それぞれの工事種別の工事原価の合計額に対する主たる工事の一般管理費等率により算定する。

(4) 共通費の積算手法は、設計図書の変更があった場合においても、原則として変更しない。

9 営繕工事のいずれかと営繕工事以外の工事を一括して発注する場合

共通費は、営繕工事と営繕工事以外の工事に分け、それぞれの工事毎の共通費に関する定めにより算定する。

10 後工事の取り扱い

本来一体とすべき同一建築物又は同一敷地内の工事を分割して発注し、新規に発注する工事（以下「後工事」という。）を現に施工中の工事の受注者と随意契約しようとする場合の共通仮設費、現場管理費及び一般管理費等は、契約済みのすべての工事（以下「前工事」という。）と後工事を一括して発注したとして算定した額から、前工事の額を控除した額とする。

11 工事の一時中止に伴う増加費用

工事を一時中止した場合の増加費用（工事現場の維持に要する費用、工事体制の縮小に要する費用及び工事の再開準備に要する費用）の算定は、「工事の一時中止に伴う増加費用等の積算上の取扱いについて」（平成元年2月8日付建設省技調発第57号）及び「設計変更ガイドライン（営繕工事版）（案）」（平成28年4月1日長崎県土木部建築課）による他、以下による。

(1) 工事一時中止に伴う増加費用は、工事現場の維持に要する費用、工事体制の縮小に要する費用及び工事の再開準備に要する費用（以下、「工事現場の維持等に要する費用」という。）に本支店における増加費用を加算した費用とする。

(2) 工事現場の維持等に要する費用は、中止期間中における工事現場の管理に関する計画（基本計画書）に基づき実施した内容について見積りを求め、それを参考に積み上げ計上する。

(3) 工事現場の維持等に要する費用として積み上げる内容に、仮囲い等の仮設、警備要員など当初予定価格の作成時に積み上げで算定したものがあつた場合、当初積算の方法により積み上げ計上する。

(4) 工事一時中止に係る本支店における増加費用は、設計変更における一般管理費等の算定方法と同様に、工事中止に伴う増加費用（積み上げ分）を当初発注工事内に含めた場合の一般管理費等を求め、当初発注工事の一般管理費等を控除した額とする。

(5) 一般管理費等率は、工事原価に工事一時中止に伴う増加費用（積み上げ分）を加算した

額に対応する一般管理費等率とする。

(6) 契約保証費は補正を行わない。

1.2 工事に伴う湧水の排出費用

共通費を算定する場合の直接工事費には、工事に伴う湧水等を公共下水道等に排出する場合の費用（下水道料金のみ）は含まないものとする。

1.3 共通費算定に関する数値の取り扱い

(1) 積み上げによる算定

積み上げによる算定は第3編第1章1.8に準ずる。

(2) 率による算定

「公共建築工事共通費積算基準」の率により算定した金額は、一円未満切捨てとする。

(3) 一般管理費等

算出された金額の範囲内で、工事価格が千円単位となるように一般管理費等で調整する。

設計変更及び随意契約をおこなう場合の後工事において一般管理費等を算定するにあたり、控除する前工事の一般管理費等は、減額調整する前の金額を採用する。

1.4 産廃税、有価物の取り扱い

産廃税、及び有価物控除に対する共通仮設費、現場管理費、一般管理費は計上しない。また、産廃税は共通仮設費率、現場管理費率を算定する場合の直接工事費、純工事費には含まない。

有価物控除は、共通仮設費率、現場管理費率、一般管理費率を算定する場合の直接工事費、純工事費、工事原価には含まない。

第3編 単価及び価格

第1章 共通事項

1 材料価格等

単価基準 第1編2(1)に定める材料価格等とは、杭、鉄筋、コンクリート及び鉄骨等の価格変動が大きい資材並びに建物毎に個別性が高い機器等の単価及び価格をいう。

2 市場単価

単価基準 第1編2(3)の掲載条件が一部異なる場合で市場単価を補正して算出する単価(以下「補正市場単価」という。)の補正方法は、次の式による。

なお、補正市場単価の細目工程、補正に用いる歩掛りについては各章による。

$$\text{補正市場単価 } A' = \text{市場単価 } A \times \text{算定式}$$

$$\text{算定式} = a' \div a$$

a' = 補正市場単価 A' の細目工種に対応する歩掛りによる複合単価

a = 市場単価 A の細目工種に対応する歩掛りによる複合単価

注) 算定式の値は、小数点以下第3位を四捨五入して小数点以下2位とする。

3 歩掛り

複合単価の算定に用いる歩掛りは、単価基準 第1編3で規定される標準歩掛りの他に「営繕積算システム等開発利用協議会歩掛り(以下、「協議会歩掛り」という。)」による。

また、標準歩掛の補足資料として、「公共建築工事積算研究会参考歩掛り」(以下「参考歩掛り」という。)及び、市場単価にない類似の単価の作成や見積り単価の検討資料として、「営繕積算システム等開発利用協議会参考資料(以下、「協議会参考」という。))」を参考とする。

4 工事が僅少等の取り扱い

工事が僅少の場合、施工場所が点在する場合、工程上連続作業が困難な場合等の単価及び価格は、施工に最低限必要な単位の材料、労務及び機械器具等の費用を実状に応じて算定する。

5 時間外及び深夜の労働についての労務単価

公共工事設計労務単価(以下「労務単価」という。)は、所定労働時間内8時間当たりの単価であり、時間外及び深夜の労働についての割増賃金は含まれない。

時間外及び深夜の労働は、施工時期・施工時間が制限され、割増賃金を見込む必要が設計図書に明示された場合に、労務費を下記により算定する。ただし、時間外の労働は、変形労働時間制等を考慮し、実状に応じて積算する。

【時間外、深夜の場合】

$$\text{労務費(総額)} = \text{労務単価} + \text{労務単価} \times K \times \text{割増すべき時間数}$$

ただし、 K (割増賃金係数) = 割増対象賃金比 $\times 1 / 8 \times$ 割増係数とする。

なお、K（割増賃金係数）は当該年度の「公共工事設計労務単価表 農林水産省・国土交通省」の「別表－1 割増対象賃金比及び1時間当り割増賃金係数」による。

また、市場単価の細目工種において、時間外及び深夜の労働について割増賃金を見込む必要がある場合は、割増賃金に相当する割増し率を算定し市場単価を補正する。

6 寒冷地、離島等

寒冷地における除雪に関する費用及び寒中養生のための費用等は、実状に応じて積算する。

離島等における工事の積算にあたっては、材料・労務の調達、プラント・機械器具の有無及び運搬方法等についての特殊事情を調査・検討し、実状に応じて積算する。

7 単価及び価格

単価基準 第1編2による単価及び価格の算定において材料価格、材料単価及び仮設材費は、積算資料（（一財）経済調査会発行）及び建設物価（（一財）建設物価調査会発行）等の価格の平均値を採用する。

市場単価は建築施工単価（（一財）経済調査会発行）及び建築コスト情報（（一財）建設物価調査会発行）に掲載されている「建築工事市場単価」の平均値を採用する。

8 製造業者又は専門工事業者の見積価格等

単価基準 第1編2（4）による場合で、製造業者又は専門工事業者の見積価格等を参考にして単価及び価格を算定する場合は、『（長崎県）土木工事標準積算基準書〔総則・共通編〕第2章 工事費の積算 ①直接工事費 1材料費 4）見積もりまたは特別（臨時）調査による場合（ハ）見積もり徴取・決定方法』を準用し、最安値の見積者にヒアリングを実施する等、実勢価格を勘案して単価及び価格を決定する。

9 設計変更時の取り扱い

単価基準第1編5の場合の設計変更時の積算において、当初設計の工事費内訳書に対応して種目が追加された場合の単価及び価格は、総括監督員の指示又は承諾した時点の単価及び価格とする。

10 細目工程

細目工種は、単価基準 第2編～第5編によるほかに、参考歩掛りや協議会歩掛りも参考にする。

11 「その他」の率

歩掛りの「その他」の率は中間値を標準とし、地域の特殊性等を考慮のうえ適切に定める。

なお、交通誘導警備員等の率の設定がされていない工種等については、本来事業者が負担すべき法定福利費相当額や会社経費を適切に反映した率を設定する。

12 市場単価等の補正

本来事業者が負担すべき法定福利費相当額を適切に反映するため、市場単価の補正を新営の場合、改修の場合共におこなう。なお、市場単価の補正方法は以下による。

また、表A-1、表E-1及び表M-1の改修補正率には、15(2)基準補正単価における、市場単価及び補正市場単価の補正率が含まれているので下式により算定する。

物価資料の掲載価格（市場単価以外の材工単価）を採用する場合も以下の表、各細目の補正率により算出する。

市場単価等への法定福利費の反映状況に応じ、補正率を見直す場合がある。

【新営の場合】

$$\text{基準単価} \times \text{新営補正率} = \text{新営市場単価}$$

【改修の場合】

$$\text{基準単価} \times \text{改修補正率} = \text{改修補正単価}$$

表 A-1 基準補正単価

細目	摘要	新営補正率	改修補正率
仮設工事		1.01	1.01
土工事		1.01	1.01
地業工事		1.01	1.01
鉄筋工事		1.01	1.01
コンクリート工事		1.01	1.01
型枠工事		1.01	1.01
鉄骨工事		1.01	1.01
既成コンクリート		1.01	1.09
防水工事		1.01	1.08
防水工事（シーリング）		1.01	1.12
石工事		1.01	1.10
タイル工事		1.01	1.11
木工事		1.01	1.08
屋根及びとい		1.01	1.09
金属工事		1.01	1.10
左官工事		1.01	1.14
建具（ガラス）		1.01	1.08
建具（シーリング）		1.01	1.15
塗装工事		1.01	1.14
内外装工事		1.01	1.14
内外装工事（ビニル系床材）		1.01	1.06
ユニットその他		1.01	1.04
排水工事		1.01	1.01
舗装工事		1.01	1.01

植栽及び屋上緑化		1.01	1.01
----------	--	------	------

※ 細目に記載のない外壁改修工事、撤去工事、とりこわしの補正率は1.01とする。

表 E-1 基準補正単価

工 種	摘 要	新営補正率	改修補正率
配管工事	電線管、2種金属線ぴ及び同ボックス	1.01	1.18
	ケーブルラック	1.01	1.15
	位置ボックス及び位置ボックス用ボンディング	1.01	1.17
	プルボックス	1.01	1.10
	プルボックス用接地端子	1.00	1.00
	防火区画貫通処理 ケーブルラック用(壁・床)	1.01	1.14
	防火区画貫通処理 金属管・丸型用	1.01	1.05
配線工事	600V 絶縁電線及び600V 絶縁ケーブル	1.01	1.16
電動機その他接続材 工事	金属製可とう電線管	1.01	1.15
接地極工事	銅板式、銅覆鋼棒、接地極埋設票(金属製)	1.01	1.01

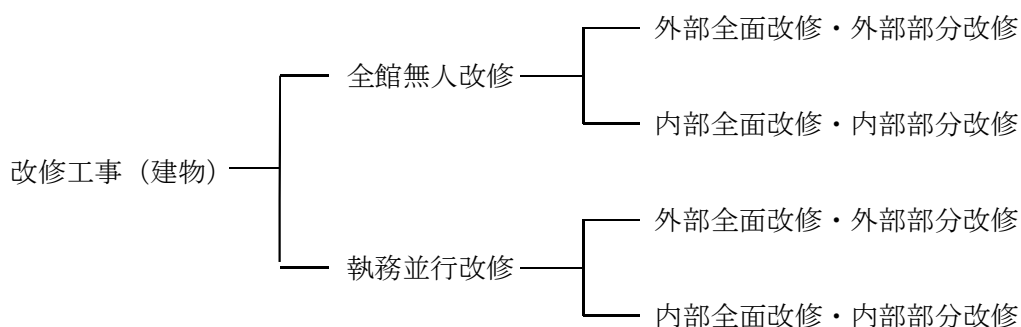
表 M-1 基準補正単価

細 目	摘 要	新営補正率	改修補正率
保温工事	配管用	1.01	1.15
	ダクト用及び消音内貼	1.01	1.14
ダクト工事	低圧ダクト、排煙ダクト及び低圧ファン類	1.01	1.14
ダクト付属品	既製品ボックス、制気口、ダンパー等の取付手間のみ	1.01	1.21
衛生器具	取付手間のみ	1.01	1.21

1.3 改修工事の分類

改修工事は、執務状態、部位、方法等により、分類できる。

(1) 執務状態、部位、方法等による改修工事の分類



(2) 執務状態の区分

改修工事は、工事期間における建物内の執務状況により、全館無人改修、執務並行改修に積算上区分することができる。

イ. 全館無人改修：仮庁舎等が準備されている等、改修する建物全館が無人（執務者がいない）の状態で行う改修工事をいう。

ロ. 執務並行改修：建物に執務者がいる状態で行う改修工事をいい、施工場所と執務中の場所が区画されている状態の工事も含まれる。また、増築工事においても既存建物と取り合う部分の改修工事については、既存建物の執務者の有無の状態により分類する。

なお、執務並行改修の場合は、施工者が執務環境に配慮等しながら施工を行うことを前提として単価の補正を行う。

(3) 部位・方法の区分

改修工事は、上記執務状態の区分による二つの区分を下記のとおりさらに細かく区分することができる。

イ. 外部全面改修：建物の屋根、外壁等の全面を改修する場合をいう。

ロ. 外部部分改修：建物の屋根、外壁等の小規模で部分的な改修及びそれらが点在する改修をいう。

ハ. 内部全面改修：建物の内部全面を改修する場合をいう。

ニ. 内部部分改修：部屋単位の床、壁、天井等の個別又は複合改修及びそれらが点在する改修をいう。

間仕切り等の撤去・新設、又は設備改修等による取り合い周辺部分の改修をいう。

1.4 執務並行改修の場合の単価の補正

執務並行改修の場合は、施工業者が執務者に配慮等しながら施工をおこなう事を前提として単価の補正をおこなう。

1.5 改修工事の積算に用いる単価の種類

改修工事の積算に用いる単価の種類は次による。

(1) 基準単価

単価基準の第2編、第3編、第4編及び本資料に定められた標準歩掛りによる複合単価並びに市場単価及び補正市場単価のほか、参考歩掛り等による複合単価

(2) 基準補正単価

イ. 建築工事については、標準歩掛りによる複合単価は労務の所要量の15%増しを標準とする。また、市場単価及び補正市場単価においては、12の表A-1による補正率を標準として算定する。

ロ. 電気設備工事については、標準歩掛りによる複合単価は労務の所要量の20%増しを標準とする。また、市場単価及び補正市場単価においては、12の表E-1による補正率を標準として算定する。

ハ. 機械設備工事については、標準歩掛りによる複合単価は労務の所要量の20%増し

を標準とする。また、市場単価及び補正市場単価においては、12の表 M-1 による補正率を標準として算定する。

二. 著しく作業効率が悪い場合においては実状を考慮し労務費等を補正する。

1.6 改修工事の積算における単価の適用

単価の適用の標準は、全館無人改修の場合は基準単価を適用し、執務並行改修の場合においては表 A-2、表 E-2 及び表 M-2 による。

表 A-2 執務並行改修の場合の単価適用区分

工 種	執務並行改修※	備 考
仮設	—	
土工	—	躯体関連工種
地業	—	〃
鉄筋	—	〃
コンクリート	—	〃
型枠	—	〃
鉄骨	—	〃
既製コンクリート	○	仕上関連工種
防水	○	〃
石	○	〃
タイル	○	〃
木工	○	〃
屋根及びとい	○	〃
金属	○	〃
左官（仕上塗材仕上）	—	〃
左官（仕上塗材仕上以外）	○	〃
建具	○	〃
塗装（改修標仕仕様）	○	〃
内外装	○	〃
仕上げユニット	○	〃
構内舗装	—	外構関連工種
植栽	—	〃
仮設（改修）	—	改修関連工種
撤去	—	〃

外壁改修	—	〃
とりこわし	—	

※ —：基準単価、○：基準補正単価

表E-2 執務並行改修の場合の単価適用区分

	工 種	執務並行改修※	備 考
共通 工 事	配管工事	○	
	配線工事	○	
	設地工事（屋内）	○	
	設地工事（屋外）	—	
	塗装工事	○	
	機器搬入	○	
電 力 設 備 工 事	電灯設備	○	屋外の場合は、基準単価
	動力設備	○	
	雷保護設備	○	
	受変電設備	○	
	電力貯蔵設備	○	
	架空線路	—	
	地中線路	—	
通 信 ・ 情 報 設 備 工 事	構内交換設備	○	
	情報表示・拡声設備	○	
	誘導支援設備	○	
	テレビ共同受信設備	○	
	監視カメラ設備	○	
	火災報知設備	○	
改 修 工 事	撤去（再使用しない）	—	
	撤去（再使用する）	—	
	再取付	○	
	機器搬出	○	
	はつり工事	○	

注) 屋外、共同溝等においては原則として基準補正単価を適用しない

※ —：基準単価、○：基準補正単価

表M-2 執務並行改修の場合の単価適用区分

工 種	執務並行改修※	備考
配管工事（屋内一般、機械室・便所）	○	屋上施工を含む
配管工事（屋外・共同溝）	—	
配管工事（地中）	—	
配管付属品	○	
保温工事	○	
塗装及び防錆工事	○	
機器搬入	○	
総合調整	○	
土工事	—	
コンクリート工事	○	屋内基礎等
機器類の据付	○	
ダクト設備	○	
ダクト付属品	○	
自動制御設備	○	歩掛りによる場合
衛生器具設備（ユニットを除く）	○	
柵類	—	
消火設備（特殊消火を除く）	○	歩掛りによる場合
配管分岐・合流・切断	○	
機器搬出	○	
はつり工事	○	
ダクト端部閉塞	○	
インバート改修	—	
撤去（再使用する）	—	
撤去（再使用しない）	—	
再取付け	○	

注) 屋内、共同溝等においては原則として基準補正単価を適用しない。

※ —：基準単価、○：基準補正単価

1.7 改修工事の積算にあたっての留意事項

改修工事の積算にあたっては、実状又は施工条件明示事項等を考慮し、施工計画上必要となる仮設類の盛替え費用及び現場施工の制約を考慮した費用等を適切に積算する。また、製造業者又は専門工事業者の見積価格等を参考にする場合は、当該工事の施工条件を満たした内容であることを確認する。

1 8 単価及び価格における数値の取り扱い

予定価格のもととなる工事費を算出する過程における数値の取り扱いは以下の通りとする。
また、端数処理を行う場合は、原則として四捨五入とする。

(1) 物価資料に基づく材料価格、材料単価及び仮設材料費、市場単価等の採用

イ. 平均値を採用する場合の端数処理は有効上位 3 桁とする。ただし、千円未満の場合は十円単位とし、百円未満の場合は一円単位とし、一円未満の場合は小数点以下第 2 位とする。

ロ. イの端数処理を行った結果、物価資料の掲載価格の方が有効桁が多い場合は、掲載価格の有効桁を採用する。

ハ. 1 つの物価資料にのみ掲載される場合は、掲載された価格をそのまま採用する。

ニ. イの処理をする前の物価資料掲載価格、物価資料掲載価格の合算単価及び物価資料掲載価格の単位換算単価の端数処理は行わない。ただし、単位換算を行った結果、小数点以下第 3 位以降がある場合は小数点以下第 2 位とする。

(2) 製造業者又は専門工事業者の見積価格等の採用

イ. 採用する価格の端数処理については有効上位 3 桁とする。ただし、千円未満の場合は十円単位とし、百円未満の場合は一円単位とし、一円未満の場合は小数点以下第 2 位とする。

(3) 標準歩掛り等（市場単価の補正含む）に基づく単価算定

イ. 標準歩掛り等で算定した単価を標準歩掛り等に用いる場合は、小数点以下第 2 位まで算出した単価を代入する。

ロ. 単価算定時における金額（数量×単価）の有効桁は、小数点以下第 2 位までとする。

ハ. 単価算定に用いる数量に小数点以下第 6 位以降がある場合は、小数点以下第 5 位とする。

(4) 細目別内訳書への単価及び金額の計上

イ. 細目別内訳書に計上する単価に、標準歩掛り等（市場単価の補正を含む。）により算出した単価、刊行物掲載価格による単価、見積価格等による単価を採用する場合の端数処理は有効上位 3 桁とする。ただし、刊行物掲載価格による単価を採用する場合は、掲載価格の有効数字の桁数と比較し、大きい方の桁を有効数字の桁数とする。なお、千円未満の場合は、十円単位とし、十円未満の単価の場合は一円単位とする。

ロ. 細目別内訳書に計上する数量で、単価が十円未満の場合は、小数点以下第 1 位を四捨五入して整数とする。

ハ. 別紙明細にて算定した金額は、細目別内訳書に円単位として一式計上する。

※ 「第 2 章 建築工事」から「第 5 章 昇降機設備工事」並びに「附表 補正市場単価算出方法」は、公共建築工事積算基準等資料（平成 2 8 年 1 2 月版）（国土交通省大臣官房官庁営繕部計画課）の「第 3 編 単価及び価格」の「第 2 章 建築工事」から「第 5 章 昇降機設備工事」並びに「附表 補正市場単価算出方法」を適用する。